

## 尻別文学歴史の会だより

蘭越町ホームページ版 : 8月号 : (平成29年8月1日/隔月発行)

花一会図書館(地域資料委員会) 編集 / 尻別文学歴史の会 協力

電話・メールアドレス

0136(57)6085(FAX 兼用)

[hanaichie@voice.ocn.ne.jp](mailto:hanaichie@voice.ocn.ne.jp)

磯谷郡蘭越町蘭越町880-9

蘭越町コミュニティプラザ花一会

文：行方 洋子（尻別文学歴史の会）

## 蘭越人物往来

## 第三回 目名農場の平田敬信 (二)

## 大阪時代

京都府に非職願を提出したときに、大阪府下福島村「盛業会社」の業務に従事する旨を書いていた。京都府を去る理由は、当時、新商工業都市として発展し始めた大阪へ行くことであった。職業として、教師でも官吏でもない新天地の開拓、すなわち実業界に挑む機会を得たのだ。

学生の頃の大阪とはちがい、西南戦争の特需や官営工場の設立や払い下げなどがきっかけとなり、民間資本による近代工場が増えていた。「大阪盛業株式会社」は、当時の第三十国立銀行頭取、大阪紡績会社社長で大阪財界の重鎮として知られる同郷丹後出身の松本重太郎らによって明治21年4月西成郡下福島(北区下福島3丁目)に設立された。ブラシ工業における我が国最初の工場制手工業、会社組織の工場、まず牛骨歯ブラシと木ブラシの製造から始め、明治23年の第三回内国勸業博覧会には、わが国初の「歯ブラシ」6点を出品した。前年には米国に製品見本を輸出し、本格的輸出向けのブラシ生産に乗り出そうとしていたその会社に、平田敬信は、技師として迎えられた。ブラシ製造業は、明治7、8年の頃、政府が「鎮台用と称して、衣服用、軍器用、馬匹用に5種一組の木ブラシの制作を大阪や東京の商人に促した」のが始まりとされる。生産形態は、職人ら、その家族、また若干の徒弟手工的小生産者を資本の大きい問屋が束ねる、問屋制家内工業だったのだが、「大阪盛業株式会社」は、初めて蒸気機関を原動力に、ブラシ工場の機械設備全部をアメリカから導入し、工場制手工業をブラシ業界に導入した。ところが、平田が入社した直後から、経済恐慌に直面し、明治25年ころにはほとんどの事業は行き詰まり、27年ころには事実上営業休止に至ってしまう。

そしてようやく業界が立ち直り始めた明治30年、盛業社社員の平田敬信は、自らが中心となって、南浦江(福島区鷺洲2丁目)に資本金20万円で「日本刷子株式会社」を設立した。日清戦争の経済復興期のこのころに、輸出ブラシを製造するこのような大規模量産化を目指した会社が、新たに次々と作られていった。明治29年南浦江の「関西貿易株式会社」は、アメリカに支店を設け、平野町の「大阪ブラシ株式会社」は、シカゴ万国博覧会に出品して銅賞をもらうなどした。そんな中、「大阪盛業(株)会社」も、資本金を増加して明治33年「帝国刷子株式会社」と改称して再出発をした。多数のライバル会社の出現である。しかし

一般にブラシは、大規模工場において一貫大量生産するには、生地制作・加工・植毛など生産工程が複雑で、変動する海外の需要に適切に対応できず、いずれ衰退する運命にあった。

満を持して、起業した平田敬信の会社「日本刷子会社」もまた、詳しい経緯は不明だが、いつの間にか姿を消し、平田は、故郷丹後に戻った。明治 33 年 3 月 29 日から与謝郡石川村で村長となる。濛々と骨粉が舞い悪臭漂う劣悪な環境の工場を運営・経営しての 10 年間は、おそらく充実感や達成感というよりは、定かでないが経済的損失と激しい虚しさを残したに違いない（「輸出ブラシ工業 上巻」参照）。

そんな折、与謝郡石川村村長の平田敬信に舞い込んだのが北海道開拓の話である。話を持ってきたのは、神鞭知常、平田が、かつて選挙応援に飛び回った衆議院議員候補であり、当選後、その華々しい活躍は、平田の耳にも入っていただろう。

#### 目名農場主の面々の中央での活動

神鞭知常は、嘉永元年（1848）丹後の与謝郡生まれ。神鞭の父重蔵が、河瀬秀治と交流を持っていた縁で、明治 4 年、当時小菅県令の河瀬を訪ねたことから神鞭と河瀬の関係が始まったとされる（「富士紡績株式会社設立に至る起業家ネットワークの形成」筒井正夫著）。河瀬秀治は、丹後田辺藩家臣の子であるが、宮津藩重臣河瀬家の養子となり、鳥羽伏見の戦いで、功を上げ新政府に出仕、各県令を歴任していた。神鞭は、河瀬に導かれるように大蔵省租税寮、内務省勸業寮などに勤務し、横浜税関に出仕する。この時、大蔵省を退官して、横浜税関構内に「開通社」なる通関手続きなどの営業する会社を始めていた田代四郎と知り合ったとされる。明治 8 年神鞭は、勸業寮職員として渡米し、翌年 3 月フィラデルフィア博覧会御用掛を務め、その後主に大蔵省勤務となる。河瀬は、明治 11 年東京商法会議所（初代会頭渋沢栄一）設立するなど、国内産業育成と日米貿易拡大に奔走していた。神鞭と河瀬は、その後横浜正金銀行管理掛と官選取締役というように同じ畑を歩み、神鞭は、明治 20 年主税局を退官し、東京で「小名木川綿布会社」設立にかかわる。官僚から実業家への転身である。

明治 23 年第一回衆議院銀選挙で神鞭を担ぎだしたのは河瀬秀治である。平田敬信が大阪の企業で悪戦苦闘していた間、神鞭は衆議院議員として、明治 29 年には法制局長官を務めるなど活躍の場を広げていき、“資源の貧弱な日本においては豊富な水力によって工業立国を目指すべきだ”と唱えた「水力組」なる同志的結合を図った（上記の書）。

水力組のメンバーの中には、河瀬秀治、田代四郎といったのちの目名農場の人々もいた。明治 17 年河瀬秀治は生糸直輸出専門商社「横浜同伸株式会社」を創設、社長に就任、神鞭は監査役を務め、明治 20 年には、「富士製紙株式会社」が河瀬によって設立され、明治 23 年には水力を動力とした洋紙製造工場（富士製紙）が建設された。同じころ神鞭設立の「小名木川綿布会社」（東京府南葛飾郡大島村）は、動力を蒸気機関によっていたが営業ははかば

かしくなく、水力利用の工場建設をすることによって業績の向上を計画した。明治 29 年静岡県駿東郡六合村小山に水力利用の紡績分工場の設立を企図したが、結局業績上がらず、同時期、近代紡績業を駆動できる豊富な水源を探していた、のちの「富士紡績株式会社」に合併されることになる（明治 36 年）。明治 29 年「富士紡績株式会社」創業時の主要株主の中に、目名農場主たち、田代四郎（小名木川綿布副社長）、神鞭知常（小名木川綿布発起人、社長）、河瀬秀治（富士製紙社長）の名前がある。

一方、丹後では

総選挙で、京都第六区選出の神鞭知常は、第一回以降、順調に選挙に勝利し続けていた。「宮津市史」によると、明治 25 年の第二回総選挙後、丹後における主要な地域振興策は、宮津港特別輸出港指定運動およびそれと結びついた鉄道敷設運動であった。

シベリア鉄道が起工され、ウラジオストック港の工事も始まったこの時、日本海側の宮津港が特別輸出港に指定されることが地域振興に不可欠であるとの考えから、地元有志から指定に向けての請願書を受け取った神鞭は、明治 26 年法案を議会に提出し、ついに宮津港が特別輸出港に指定される。同年、神鞭と他数名が発起人となり「日露韓貿易株式会社」が創設される。主要株主として与謝郡の地元有力者、その中には、もちろん河瀬秀治もいた。事業内容は、宮津港・ウラジオストック・元山・釜山間を汽船と帆船で結び、石材や食牛、米雑貨を輸出して、大豆、漁獲品、牛皮牛骨、雑貨を輸入するというものだった。

そして宮津港が特別輸出港指定されたことで、後背地の鉄道敷設の運動が本格化する。早速、京都府技師島田道生を招き宮津・福知山間の鉄道線路の測量に着手し、明治 27 年「鉄道期成同盟会」が組織される。明治 29 年 6 月には、「丹後鉄道株式会社創立願」が出され、仮免許が下りる。同年 12 月神鞭主導で「丹後鉄道株式会社」が発足した。発起人は数多いが、神鞭、河瀬、田代そして寺師宗徳（東京市・元官僚）の名前がみられる。寺師宗徳は、目名農場主の一人であるが、神鞭の大蔵省時代の同僚で、「国家経済界」の同士でもあり、「丹後鉄道株式会社」の社長も務めた。

このように、彼らは共通して元官僚で、日米貿易から始まり、工業を起こし”輸出振興によって輸入防遏をはかり国家の独立を推し進めていこうという独立自営の精神に裏打ちされたナショナリズムの持ち主でもあった“(富士紡績株式会社設立に至る起業家ネットワークの形成より)。

ただ、明治 33 年神鞭が平田に持ってきたのは、地元宮津の会社、貿易や鉄道事業とは程遠い北海道開拓農場の監督になる話であり、しかも天橋義塾時代の元同僚川村政直が監督をしていたがうまくいかず、病没した後の代替として要請されたのだ。明治 29 年の農場貸下げの申請時には、平田は大阪にいたので、声がかからなかったのは仕方がないにしても、農

場の貸下げ許可から無償付与までの残りの年限は短く、いまだほとんど手付かずの広大な未開地を一気に開拓せよという無茶な話に乗るわけにはいかなかった。失敗すれば、大阪時代の挫折どころでない、故郷のすべてをも失うことになる。平田は、神鞭の再三の懇願に固辞し続けた。神鞭は、丹後の風土が生んだ“ やったれえ ”精神の持ち主である平田敬信を、農場の監督という仕事にうってつけたと見込んでいたのだろう。地元の救世主たる神鞭の懇願に、平田は困りはて進退窮まったのではないだろうか。

神鞭知常、河瀬秀治、田代四郎、村師宗徳らの目を、北海道に向かわせたのは、いったい何だったのだろうか。

#### 北海道の状況 鉄道敷設計画と目名農場

北海道開拓の初めから道路と並んで鉄道の建設は、焦眉の問題であった。歴代北海道長官は、鉄道敷設に苦心を重ねてきたが、前京都府知事北垣国道が、明治 25 年第四代長官に就任すると、にわかに現実味を帯びてきた。明治 26 年井上毅枢密顧問官が北海道を巡視し、出された意見書に、空知太・小樽および小樽・函館間の鉄道が最も急を要すると書かれていた。北垣長官は、就任以前の明治 21 年に平井清二郎技師が行った鉄道敷設測量(小樽・函館間)の概要報告書を参考に、工費見積もりを 800 万円とし、明治 27 年 5 月の第六国会で政府に建議した。その年の 8 月、道庁は、工科大学教授田辺朔郎に委嘱して北海道幹支線鉄道調書及幹線図を編成した。北垣長官は、翌年、北海道の鉄道敷設は、軍事上、殖民上の緊急事業であると内務大臣に訴えた。明治 28 年日清戦争後の企業勃興に際し、民間にも鉄道敷設熱が起こり(上記丹後鉄道の例) 2 月京都の大野嘉助ほか 9 名が北海道鉄道事業を発議、明治 29 年 1 月には、発起人を増加して渋沢栄一ほか 124 名で「函樽鉄道」として請願するが、却下されてしまう。ただし 5 月には北海道鉄道敷設法が制定公布された。その後紆余曲折があったが、明治 30 年 4 月私設事業として函樽鉄道発起人に仮免許状が交付され、明治 33 年本免許状がおりた。すでに長官を退いていた北垣国道が社長に就任した。その後社名を「北海道鉄道株式会社」と改め、不況など様々な難関に遭遇しながら、明治 34 年 6 月にようやく工事着工となる。(小樽市史参考)

北海道の鉄道敷設計画は、国会での審議を経て衆知のことではあったろうが、神鞭や河瀬らには、旧知の北垣国道を通じて、より詳細な情報がもたらされた可能性はある。

北垣国道は、但馬国養父郡(兵庫県)の出身で、京都府知事時代に田辺朔郎を起用して、あの琵琶湖疎水を作ったことはよく知られているが、それ以前に北海道と縁があった。以下「北垣国道と小樽」本間勇児著を参考にする。

#### 小樽

明治 4 年に北垣国道は、開拓使 7 等官に出仕した。箱館戦争後捕らえられた榎本武揚が放免され、明治 5 年開拓使出仕となり、物産調役として北海道の鉱物資源や物産調査を命じ

られた。この時の補佐役として宗谷方面から離島、小樽、札幌と調査に同行したのが同年齢の北垣国道だった。

官有地の払い下げの布告があり、両人は、小樽未開地 10 万坪を払い下げる申請を黒田次官にして取得し、榎本と北垣は、明治 7 年北海道を離れた。その後、明治 14 年小樽に大火があり、市街地が手宮裡町や稲穂町に移動したことから、梁川通に土地管理のための「匿名組合 北辰社」事務所を設置した。幌内鉄道が開通し小樽港は大商港になっていく。北垣国道が京都府知事の時代、事務所は管理人に任せてあったが、管理人の死亡などで新たな管理人を探していた。そこへ京都府高等女学校教諭の寺田省婦が辞任のあいさつにやってきて、知事北垣は、人物を見込んで、「北辰社」の管理人を要請したということらしい。そして明治 25 年北垣国道が北海道長官になると、寺田省婦は、小樽に転居して「北辰社」を切り盛りした。その後明治 28 年ころから稲穂町一円を思い切った整地をする。寺田省婦が支配人で、北垣国道の娘婿の田辺朔郎に依頼し、丘陵を切り取り、谷地沼沢を埋め立てた。北垣と榎本の共有地 10 万坪は、ほぼ平坦になった。「北辰社」は、のちに平田とかかわることになる。

話は、神鞭と平田に戻る。目名農場は、函館と小樽の間、北海道鉄道予定路線上にあった。農場はすでに貸下げの申請・許可済みで、明治 30 年に開拓に着手したが、3 年間ほとんど開拓はできていない。神鞭には、何としても平田に監督になってもらい、成墾にこぎつけたい、との思いがあった。どうしても首を縦に振ろうとしない平田に対して、何らかの提案をしたのだろうか、ついに平田は、北海道に来ることを承諾する。交渉の中身は、残念ながら残されていないが、平田がその後の北海道で得たものを見ることによって少し明らかになるのだろう。